

胡桃を食べる男たち

—— ブレンターノとクライストの物語についての思いめぐらし (S. Yamanaka) [J]

アルトオルフの教授であったメラー氏が、家庭教師先での食事の席において、食後のデザートに供された胡桃を面白がって次から次へと割って遊ぶ腕白な教え子たちを諷めるべく、とあるラテン語の医学書からエピグラムを引用してみせるといふいかにも説教臭いとしか言いようのない場面からクレメンス・ブレンターノの短編「三つのくるみの実」(*Die drei Nüsse*) は語られ始めるのだが、生徒たちによる“*Unica nux prodest, nocet altera, tertia mors est.*”という詩句の翻訳「くるみ一つは健康によし。二つはわるし。三つたべると死をまねく」を聞いたメラー氏が、皆が三つ目の胡桃を食べてしまったのに、ちっとも死んでいやしないのだから、などと言ってその翻訳の間違いを指摘するにおよんで、わたしにはこの胡桃にまつわる毒のある栄養という観念がきわめて魅力的に思われるのだ。このエピグラムはその後も幾度か変奏され、魅力的なメロドラマめいた物語の筋書きに奉仕することになり、その意外に退屈な結末も含めここでは語るに及ばないのだが、この毒のある栄養、パルマコンでも言うべき胡桃にまつわるイメージからは、幼年時代のさまざまな食品にまつわる記憶が呼びおこされもする。幼少のころにある種のビタミン剤として与えられていた「肝油ドロップ」はもちろんかつての栄養不足の時代のようにサメやエイの肝油から精製されたものではあり得ず、柑橘系のフレーバーに糖衣のまぶされたゼリー状の甘いおやつだったのだが、その「肝油ドロップ」をめぐって、わたしの周囲でまことしやかに囁かれていたのが「二つ以上食べたら死ぬ」というエピグラムだったのであり、おそらくそれは、ビタミンの摂りすぎで(?) 子どもに鼻血でも出された日にはとてもかなわない、といった大人心配から生まれてきた言説だったのではなかっただろうか。

ところでわたしはこのブレンターノの短編を集英社から出版されている手塚富雄編『世界短編文学全集3 ドイツ文学 19世紀』(近所のBOOKOFFにて購入、税込¥108!) の中ではじめて読んだのだったが、編集者としての手塚の辣腕ぶりに感心するのは、ブレンターノの短編に加え、同書中にクライストの短編、それも「拾い子」(*Der Findling*)がおさめられているという点である。わたしはクライストのこの短編を読むことではじめて、胡桃を食べる男のうつくしさを、とでもいったものをつくづくと思い知ったのであり、その際、もちろんわたしの想像力を助けることになったのは、湯浴をしている男が、連れれの少年の、片足をもう片方の腿にのせて座っているようすから、有名な「棘を抜く少年」の彫像のうつくしさを想起し、少年の方でも鏡に映った自身の姿に同じ彫像のうつくしさを認めていて、赤面しつつもそのしぐさを反復しようとし、かえって笑いものになるという、対話形式のエッセイ風物語『マリオネット劇場』に引かれている挿話なのだが、商用の旅の途上、疫病で一人息子を失った老仲買人のピアキによって、亡き息子の代わりとでもいった調子で連れ帰られる

ことになる「拾い子」ニコロが車中で胡桃を食べるようすが、老ピアキのどことなくいやらしい視線をとおして描写される時、わたしには、両挿話に共通する若さと結託した、匂い立つようなナルシシズムの過剰が、議論の論証や物語の筋の形成という役割から解き放たれて、それ自体で自律した文脈を生み出そうとしているかのように感じられ、そのような逸脱をうっとりとして読むことになるのである。一方で、胡桃に関して言えば、この場面は、ニコロが歯で胡桃の殻をかち割るというしぐさが、映画撮影のカチンコによるカットのそれのように感じられることから、E・ロメールが映画に撮るべきだったのはむしろこの短編だったのではないか、などという空想を導くと同時に、はたしてこの木の実(Nüsse)はほんとうに「胡桃」でよいのだろうかという疑問をも生ぜしめるのである。

そもそもブレンターノの短編では、慇懃にも *welsche Nüsse* と言われていたので、これを「胡桃」と翻訳することは正しいのだが、クライストの短編では単に *Nüsse* と書かれてあるだけである。またニコロの健康的な白い歯が（胡桃色、と同語反復的に言ってしまいたいような）黄褐色の胡桃の堅い殻を勢いよくかち割るようすというのは確かに魅力的であるのだが、たとえば飲みの席でそこそこの酒を飲んだ日の翌朝、まだ火照ったようなぼんやりした状態でずるずると起きだし、水を飲もうとして、ふしぎに奥歯がじんわりと痛むときに、酔いの手持ち無沙汰につまみのピスタチオをもてあそび、歯で割ろうとしたのを思い出してうんざりするわけなのだし、いくら若くて健康的な白い歯だとはいえ、はたして胡桃の殻をそうやすやすと噛み砕けるのかと疑わしく思われるのである。

ブレンターノの短編と同様にクライストのこの短編においてもまた、いわばメロドラマ的な筋書きが用意されているのだが、ニコロが胡桃の殻を歯でかち割ることでカットがかり、切り替わったシーンにおいて語られる「拾い子」ニコロの義母（ピアキの若妻）エルヴィーレに関する挿話によれば、彼女はかつて火災に遭った際、とある貴族の青年によって救出され、九死に一生を得たものの、一方でその貴族の青年は彼女の救出の際、頭部にひどい怪我を負ってしまい、手術を受けたものの、エルヴィーレによる手厚い看病もむなしく数年して亡くなってしまふのであった。ニコロの歯で胡桃の殻がかち割られることと、重傷を負った青年貴族の頭蓋が手術によって切開されることとのあいだにはイメージの相同的な連関が認められるのだが、『言葉と物』のフーコーに拠れば、頭蓋と胡桃とのあいだに形態的類似を認めることはきわめてありふれたヨーロッパ的想像力であったのだし、その形態的類似から胡桃が脳の病に効く薬として用いられたということを考え合わせると、そのイメージは実践的な知に結びつくような力を持ってもいたということがわかるのである。

したがって反復される頭蓋のイメージを導くための火口^{ほくち}として、クライストの *Nüsse* はピスタチオでもアーモンドでもなく、やはり「胡桃」でしかありえないのだが、物語を読み進んでいくと、この胡桃＝脳のイメージの連関が力をほとばしらせ、ブレンターノの物語とは打って変わって緊張した物語の結末をつくり上げていくということが明らかになる。ネ

タバレというものがほとんど意味を成さないように思われるクライストの物語であるから、あえて言ってしまうと、物語の末部において、激情に駆られたピアキがついにニコロの頭蓋を壁に打ちつけて押しつぶすことになるのだが、ここにいたってわたしたちは、健康的な白い歯で堅い胡桃の殻をかち割るニコロによるカットが、実はジャンプ・カットでもあり、いわばニコロは胡桃の殻をかち割るその歯で自身の頭蓋をもかち割ることになってしまったのだということを知るのである。「一つかみの胡桃」を食べすぎたことで死に至ってしまうというブレンターノ的な想像力でもってクライストのテキストを読んでしまうということ、この横溢的で恣意的な読みこそは、蓋し文学全集を読むことの愉しみの一つなのだ。

山中 慎太郎（東京大学）

0192

作成日 : 2023/03/03